
発見の喜び —— 歴史言語学の新天地 ——

彭 国 躍

最近、新しい歴史言語学を開拓しようと意気込んでいる。「大発見だ」と興奮することもしばしばある。大袈裟な独り善がりになりがちでない。しかし、その独り善がり仕事をしている実感を与えてくれている。

日本語の敬語研究は、体系的な取り組みとして明治時代から始まったとされている。その前にロドリゲス(1561-1634)の敬語記述はあったが、日本の国語学には受け継がれなかった。私は以前から、敬語研究が明治時代に突如に現れたというような捉え方に疑問を感じていた。松下大三郎、山田孝雄など明治の先駆者たちが「敬称、尊称、謙称、美称」などのような術語を使っていたことに、何か前史的なものがあったのではないかと感じていたのである。

その疑問を抱きながら、数年前から江戸時代の文献に当たってみた。荻生徂徠(1666-1728)の『訓譯啓蒙』に「忝、辱」を「彼ヲアガメ尊デ、己ヲ謙ズル辭ナリ」、岡白駒(1692-1767)の『助辭譯通』に「請、幸」を「敬ノ辭、謙ノ辭」、釋大典(1719-1801)の『詩歌推敲』に「竊」を「謙辭」と解釈しているなどの事実が見つかった。日本語敬語研究史ではすっぱり抜けていた江戸漢学における敬語問題への取り組みが垣間見えた。

徂徠の朱子学批評からもしやと思い、朱熹(1130-1200)の著書の調査を行った。案の定、『論語集注』と『朱子語類』に「尊稱、謙稱、謙辭、美

稱」などが使われたことを発見した。宋代(960-1278)にあるなら、唐代(618-907)にもあるだろうと、孔穎達(574-648)、李善(?-689)などの注疏文献を調べてみたら、ことばの含意解釈として「謙辭、謙稱、美稱、通稱」などが使われたことを発見した。

研究には欲がつき物である。中国語に「順藤摸瓜」(蔓をたどって瓜を探す)という諺があるように、古い時代に遡ろうと、漢代(紀元前202-220)の訓語学者の注釈本を片っ端から読み漁った。高誘(205年在世)、何休(129-182)、鄭玄(127-200)、趙岐(110-201)、許慎(58-147)、孔安国(紀元前104年在世)などと。彼らの訓釈に「尊稱、謙稱、美稱、賤稱、尊敬辭、謙辭、應敬之辭、非敬辭、相親之辭、親愛之言」など敬語関連の術語がどしどし現れた。二千年前の訓詁文献にBrown & Levinson(1983)のpositive politenessとnegative politenessを含めた対人機能の解釈がなされたことに驚きを禁じえなかった。

ここまで来たら行ける所まで行こうと思い、春秋戦国時代(紀元前770-前221)の文献『十三經』を通読した。もっとも古いものとして『春秋穀梁傳』に「尊稱、卑稱、美稱」、『春秋公羊傳』に「卑辭」という術語が使われたことを発見し興奮した。

日本の敬語研究史への興味がきっかけでこの調査を始めたが、気がついたら、十年の歳月が流れ

た。歴史社会言語学、歴史語用論の新しい地平が見えたような気がしてひとりで喜んだ。膨大なデータの収集と整理に明け暮れている自分を支えているのは、まさにその時々発見の喜びである。

参考文献：

Brown & Levinson 1987 *Politeness: Some universals in language usage* Cambridge University Press.

彭国躍 2007 「漢代鄭玄が訓釈した古代中国語の対人関係機能について—歴史語用論のアプローチ」『語用論研究』(9) 日本語用論学会
